

第五回 青年部設立準備会 in 日向

第5回目となる青年部設立準備会は、県央より北部の会員にも青年部設立の意義を伝えるため、日向市で開催した。2019年5月7日、日向市駅の前にある「障がい者センターあいとびあ」の会議室に、宮崎県中小企業家同友会（以下、同友会）の青年部設立準備会のメンバーに加え県北支部、ひむか支部の会員も集まった。

まず最初に、4月17日に開催した青年部設立準備会として第一回目となる例会（DoYou Activity Report File No. 010参照）のレポートやアンケートを確認しながら、振り返りを行なった。課題は多く見つけたが上々の出来だった、青年部の趣旨に沿った例会になった、大いに刺激になった等の意見が多かったが、グループ長の力量がまだまだ足りない、ゲストが入会するまでに至らなかった等の反省点も多く挙げられた。特にグループ長を初めて経験した人も多く、熱量が高い例会だったこともあり、グループ討論の進行の難しさを感じた人が多かった。



「青年部って楽しそうだ」

経営体験報告を行なった株式会社南九州みかど代表取締役の迎敦雄氏は、自身の経営体験を多くの人前で話すのは初めてだったが、アンケートを読み、挑戦してよかったと語った。青年部の例会は、同友会の支部例会において経営体験報告者になるための入口のような役割もあると言う。株式会社ビューフィールド常務取締役の前島崇志氏は、とにかく準備の段階から例会本番まで楽しかったと感想を述べ、「青年部って楽しそうだ」という雰囲気を与えることが大事だと訴えた。



青年部の例会は 報告者を育てる場

株式会社アドカム代表取締役の桑山直幸氏は、「僕みたいな者が報告しているのに、みんなは報告しないのか？」という気持ちを胸に、少し煽るような内容にあえてしてみたそうだが、その効果はあったと感じたようだ。また、自身の力量では支部例会で経営体験報告を行うのはまだまだ先の話とし、迎氏と同じように青年部の例会は報告者を育てる場にもなると語った。

第25回 宮崎北支部 定時総会

宮崎同友会の五つある支部の一つであり、県を中心に位置する宮崎北支部の第25回目となる定時総会が2019年5月14日にホテルマリックスにて開催され、約40名の会員と3名の高橋信用金庫の支店長が参加した。定時総会は記念講演を行った。支店長が参加した。定時総会は記念講演を行った。支店長が参加した。定時総会は記念講演を行った。

前期は新会員の退会が激減

第一号議案の「2018年度を振り返って」は、井手真弓代表幹事（社会保険労務士法人ALX代表社員）によって提案された。景況調査の結果を支部活動に活かしていく仕組みづくりに着手したこと、市内で開催された「第6回入会生をさかす経営全国交流会」において支部から参加したほとんどの会員がグループ長を務めたこと、「宮崎同友会 Vision 30th」を元例会テーマを組み立てたこと等を振り返った。特に一定の成果が認められたのは、幹事会と連動した新入会員オリエンテーションであり、幹事が出席している幹事会に続けて新入会員オリエンテーションを開催することにより、新会員と現職の幹事との交流が盛んになり、新会員の退会が激減している。

また、総括として、宮崎北支部の会員が中心となり設立を目指している青年部について触れ、支部としても全面的に応援する考えを伝えた。

さらに支部活動の活性化を

第二号議案の「2019年度の活動方針と活動計画」は、橋本格郎代表幹事（株式会社合格不動産代表取締役）によって丁寧に解説された。始めに、入会して一年未満の会員が今期の幹事に立候補する等の動きから、長らく低迷してきた宮崎北支部の活動が、昨年度から徐々に活発になっていくことを紹介。続けて、人口減少社会の到来、高度情報化社会やグローバル経済の進展、雇用環境の変化等々の社会的背景と課題を踏まえ、「だから

同友会らしい青年部とは

設立準備会において継続して協議している「青年部の目的、活動計画」についても、初めて参加するひむか支部や県北支部のメンバーも加えて意見交換をした。他団体の青年部にも入っている人からは、地域づくりを柱にイベント企画運営が主な活動になっている地域の青年部とは一線を画した同友会らしい青年部が必要だという意見が上がった。また、業界団体の青年部に所属する人は、雇用もしていない小規模事業者が多い青年部において、経営課題として売上や業績が目が行きがちであり、その実態と同友会らしい経営姿勢を問う学びの場のバランスをとる必要があると、自身の思いを主張した。

県北で大いに交流

今回の設立準備会は、県央より北部の会員との交流の場としての意味合いもあり、会議の後は近所の居酒屋に場所を移して懇親会を開催した。青年部の意義についてより深掘りした体験談を語り合ったり、互いの経営姿勢について指摘し合った。青年部らしい熱い議論を交わすことができた時間となった。



自社の経営における課題にどのように結びついていくかをそれぞれが考えることに意義があるためだ。私のグループでは、事業継承に不安がある、社員がついてこない、幹部が育たないといった課題が上がった。

一人では何も出来ない 私たちのような小さな人間の指

「幹部の覚悟が足りない」や「全社一丸」というのは諦めた」という持論を展開した人の意見をきつかけに、会歴の長い先輩会員が静かに語った内容が印象的だった。「一人では何も出来ない私たちのような小さな人間が、自分の夢を実現するために『この指とまれ』と声を上げたのに対して応えてくれたのが、今いる社員達だ。志が高いことと人格が高いかどうかは別であり、経営者と社員であっても人としては何の疑いもなく対等平等である。小さな人間の指に止まってくれた大切な仲間であることを忘れてはならない。これには誰も反論することはできなかつたが、議論はさらに深く展開していった。対等平等である口で言っているだけではなく、本質的に「人間尊重経営」ができていないのかを問うことは、経営者が自身とことん向き合って考えていかなければならない。よほどの人格者でない限り、「自分はできていない」と言い切れることではない。また、「この指とまれ」と言うからには、「この指」の定義が明確に示されていて、正しく伝わっているかが重要だ。「この指」は、経営理念であり、経営指針であると共に、労働者にとっても給与を含む労働環境でもある。これらが明確に定義されていないことはもちろん、伝わっていない



議案の提案、審議、採択を経て、参加者全員で「自社の経営課題」をテーマにグループ討論を行った。これは同友会運動と自社経営は不離一体であるという考えに基づき、同友会の活動方針と計画が、

第一回 共育ち委員会



5月9日、同友会ネットワークセンターにて今年度として第一回目となる「共育ち委員会」が開催された。共育ち委員会は、社員と共に経営者も育ち合うことを目的に、新入社員研修会や「新入社員と3年目の社員を対象としたステップアップ研修」等を主催しており、共同求人委員会と協力してインターンシップや高校等への出張講座も企画運営している。第一回委員会では、今期の活動方針及び活動計画を協議し、大まかな方針を決定した。また、先月25日に行われた第4期みやぎ共育ち同友会第一講を振り返り、参加した各社の社員のレポートを参照し、彼らの期待や意気込みに応えることができる今後の講義の在り方について協議を行なった。

同友会をめざす企業像 もっといい会社に。学びと実践を深める。

同友会では、これからのめざすべき企業像として1993年 中同協第25 回定時総会にて「21世紀型中小企業づくり」を提起しました。この総会宣言で提起されためざす企業像は「自立型企業」へと発展してきています。

- 1 自社の存在意義をあらためて問いなおすとともに、社会的使命感に燃えて事業活動を行い、国民と地域社会からの信頼や期待に高い水準で応えられる企業。
- 2 社員の創意や自主性が十分に発揮できる社風と理念が確立され、労使が共に育ちあい、高まりあいの意欲に燃え、活力に満ちた豊かな人間集団としての企業。

個人主義の中での 全社一丸組織づくり

このような議論を展開していく中で、「個人主義の今の時代における経営は本当に難しい」という声も上がった。少し前までは、創業することやリーダーになることに価値があり、組織運営において統率力や牽引力が問われたが、現在はそれぞれの考えを尊重してどれだけ強固な関係性を作れるかが重要とされる。経営における多様性の尊重が叫ばれる中、個人主義の上での全社一丸組織づくりという難しい課題が突きつけられている。だが、ちようど半世紀前に始まった同友会運動は、自主性を大切にし、ボス支配を許さず、協力し合うこと（自主・民主・連帯の精神）を掲げ、まさに今の時代をあるべき未来の姿として描いているということに、改めて驚かされる。

文・構成・撮影



竹原 英男
TNAソリューションデザイン株式会社
代表取締役
宮崎北支部・理事・増強本部長・
組織強化連絡会議委員・
産学官民連携部会 MANGO 会長（兼担当理事）・
広報委員会担当理事・青年部設立準備会担当理事

本資料は同友会の会員がゲストや非会員を訪問したり、入会や例会参加をお誘いする際に活用していただくために試験的に増強本部が発行しています。PDF ファイルをダウンロードできますので、印刷する等としてご活用ください。